

# 猩々

世阿弥作

季は	地は	ワキ
秋	唐土	シテ 猩々 かうふう

「是は唐かね金山の麓。揚子の市にかうふうと申す民にて候。さても我親に孝あるにより。或夜不思議の夢を見る。揚子の市に出で、酒を売るならば。富貴の身となるべしと。教へのまゝになす業の。

時去り時來りけるにや。次第々々に富貴の身となりて候。又こゝに不思議なる事の候。市毎に来り酒を飲む者の候ふが。盃の数は重なれども。面色は更に変はらず候ふ程に。余りに不審に存じ。名やと存じ候。

歌  
「潯陽の江の辺にて。く。菊をたゝへて夜もすがら。月の前にも友待つや。又傾くる盃の。影をたゝへて待ち居たり。く。

地  
「老せぬや。く。薬の名をも菊の水。盃も浮かび出でゝ。友に逢ふぞ嬉しき。此友に逢ふぞうれし

き。

シテ  
「御酒と聞く。」

地 「御酒と聞く。名も理や秋風の。」

シテ  
「吹けどもく。」

地 「さらに身には寒からじ。」

シテ  
「理や白菊の。」

地 「理や白菊の。着せ綿を温めて。酒をいざや汲ま  
よ。」

シテ  
「客人も御覧ずらん。」

地 「月星は隈もなし。」

シテ  
「所は渟陽の。」

地 「江の内の酒盛。」

シテ  
「猩々舞を舞はうよ。」

地 「蘆の葉の笛を吹き。波の鼓どうと打ち。」

シテ  
「声澄み渡る浦風の。」

地 「秋の調べや残るらん。」

(中の舞)

シテ

「有難や御身心すなほなるにより。此壺に泉をたゝ  
へ。唯今返し与ふるなり。よも尽きじ。

地  
「よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽  
きず飲めども変はらぬ。秋の夜の盃。影も傾く入  
江に枯れ立つ。足もとはよろくと。弱り臥した  
る枕の夢の。覚むると思へば泉は其まま。尽きせ  
ぬ宿こそめでたけれ。